

カワネズミ 食虫目(モグラ目) トガリネズミ科
Chimattogale himalayica (Temminck, 1842)

鳥取県: 準絶滅危惧(NT)

環境省: -



広島県芸北町 1993.9.19 / 撮影: 保井 浩

選定理由: 主な生息域である河川上流部の生息環境が、三方コンクリート護岸や各種工作物の建設等によって急速に悪化していることから十分な注意が必要。

形態と生態: 全身ダークグレイの柔毛に覆われた大型のトガリネズミで、尾が長い。銀色の差し毛を有し、手足には剛毛が生えて水掻きの役をする。体サイズは頭胴長100-130mm, 尾長90-120mm, 体重25-55gほど。昼夜を問わず活動し、水中でサワガニ、水生昆虫、魚などを捕食する。潜水中は毛の間に気泡が閉じこめられ、銀色に輝いてみえる。

分布(県内): 県内各地の河川の下流域から上流域まで生息しているが、上流域の水がきれいである場所での目撃が多い(八頭郡河原町三滝溪VII.2000, 郡家町姫路VI.2000, 八東町ふるさとの森VII.2000, 用瀬町杉森VI.2000など)。



分布(県外): 北海道と沖縄を除いた全国の河川; 台湾, 中国~マレー半島, ヒマラヤ, スマトラ, ボルネオ北部。
生息環境: 下流域ではヤナギやヨシなどの植物豊富な岸辺のある場所, 上流域では護岸の行われていない場所。

保護上の留意点: 最近, 上流域において砂防ダムの建設, 河川の底部と側部をコンクリートで固める三方コンクリート護岸が実施されているが, これらの工法だと本種の移動の妨げや生活拠点である土や石, 豊富な植物のある岸辺の亡失など生息環境の悪化につながる。生息域においてこれらの工法を用いるときにはとくに注意が必要である。

特記事項: 水産庁編RDB(1998) 希少種。

文献: 山本賢二(1993)ニホンカワネズミ. pp. 6-7. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物)。

執筆: 井上牧雄

ヒメヒミズ 食虫目(モグラ目) モグラ科
Dymecodon pilirostris True, 1886

鳥取県: 準絶滅危惧(NT)

環境省: -



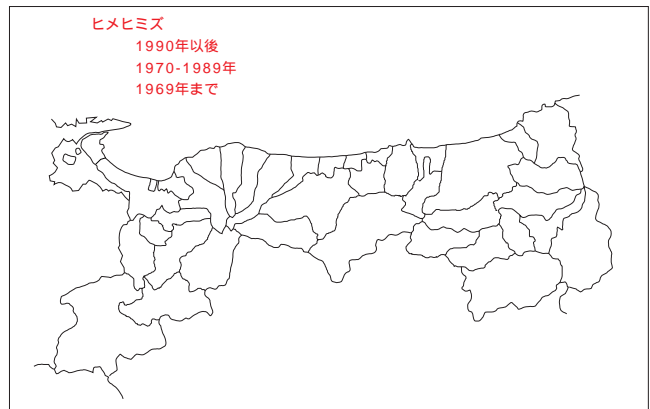
撮影: 澤島拓夫

選定理由: 大山夏山登山道で1968年に4個体(3雄, 1雌)が記録されている。詳細な現状は不明であるが, 生息地の局限性が強いと考えられる。

形態と生態: 非常に小型で, モグラとトガリネズミの中間の外形。尾が長い。頭胴長70-80mm, 尾長35mm, 体重8-15gほど。おもに昆虫類, ミミズ類を捕食。春に繁殖し, 寿命は通常2年あまり。

分布(県内): 鳥取県大山夏山登山道。

分布(県外): 本州中部以北と紀伊半島, 四国, 九州の一部の山岳地(日本固有種)。



生息環境: 高標高地, 岩礫地。

保護上の留意点: 山地自然林の保全とともに, 現在の生息状況の実態調査が必要。

文献:

阿部 永・横畑泰志(編)(1998)食虫類の自然史. 比婆教育振興会(庄原)

吉田博一(1969)大山の小哺乳類に関する二, 三の知見. 哺乳動物学雑誌, 4: 127-130.

執筆: 巖城 隆

ミスラモグラ 食虫目(モグラ目)モグラ科
Euroscaptor mizura (Günther, 1880)

鳥取県：絶滅危惧 II 類(VU)

環境省：準絶滅危惧(NT)



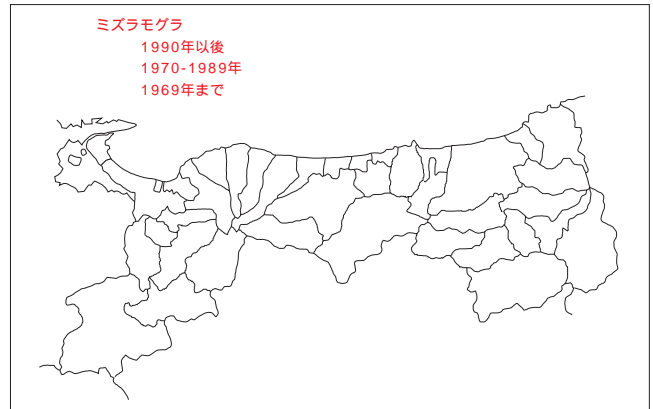
撮影：野呂達哉

選定理由：氷ノ山より2回(1991, 1994年)記録されている。分布の局限度が高く、注意が必要である。

形態と生態：小型のモグラで、尾は比較的長い。頭胴長80-105mm, 尾長20-25mm, 体重30g内外。昆虫類, ミミズ類, ジムカデ類, ヒル類を捕食。

分布(県内)：現在のところ氷ノ山のみから記録。

分布(県外)：本州の山岳地(日本固有種)。中国地方では, 兵庫県宍粟郡の3地点(波賀町音水など), 岡山県苫田郡上斎原村恩原高原, 広島県(比婆郡, 山県郡)などに散発的に記録されるのみ。



生息環境：山岳地。

保護上の留意点：山地の自然林の保護・保全が必要。

特記事項：1994年に捕獲された個体の標本は鳥取県立博物館に所蔵。

文献：

阿部 永・横畑泰志(編)(1998)食虫類の自然史. 比婆教育振興会(庄原)

浅井三礼(1991)氷ノ山で採集されたミスラモグラ. 比婆科学, 150: 46-47.

執筆：巖城 隆

アズマモグラ 食虫目(モグラ目)モグラ科
Mogera imaizumii (Kuroda, 1957)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



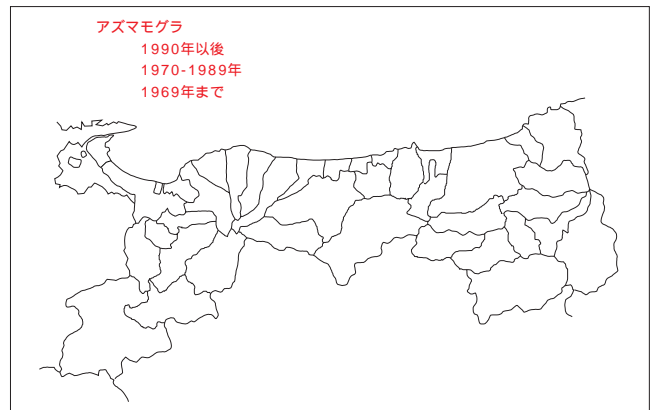
撮影：横畑泰志

選定理由：県西部から1955, 1957年の記録があるが, 現状の詳細は不明。現存すればおそらく孤立個体群である。

形態と生態：モグラ属中では最小だが, 体サイズはきわめて変異に富む。尾は短い。頭胴長120-160mm, 尾長15-20mm, 体重50-130gほど。おもに昆虫類, ミミズ類を捕食。春に1回繁殖し, 2-6頭の仔を産む。寿命は3年余。

分布(県内)：米子市および西伯町。

分布(県外)：本州中部以北, および紀伊半島南部を含む本州南部各地の山地, 四国山地, 小豆島(日本固有種)。



生息環境：低地から高山帯まで分布するが, 低地の農耕地に多い。

保護上の留意点：現在の生息状況の実態調査が必要。

文献：

阿部 永・横畑泰志(編)(1998)食虫類の自然史. 比婆教育振興会(庄原)

西田 弘(1958)山陰における恙虫の研究. 米子医学雑誌, 9: 909-926.

執筆：巖城 隆

コキウガシラコウモリ 翼手目(コウモリ目)キクガシラコウモリ科
Rhinolophus cornutus Temminck, 1835

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



撮影：子安和弘

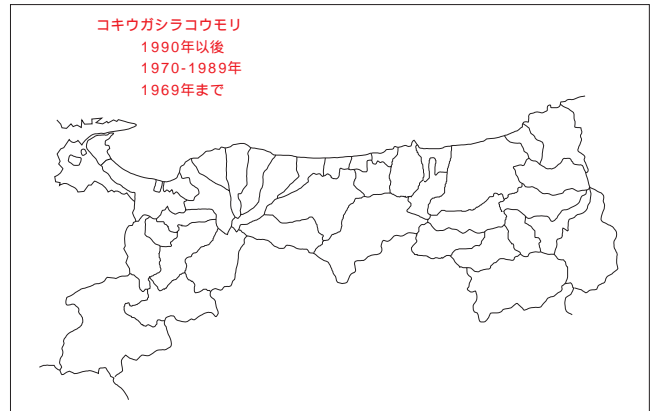
選定理由：生息地の局限度が強いと考えられる。

形態と生態：頭胴長35-50mm，尾長20mm内外，体重4.5-9gほど。北方の集団ほど小型になる傾向が認められる。昼間は洞穴で集団で休息し，モモジロコウモリと混群を形成することも多い。おもに小型の飛翔昆虫を捕食。初夏に1仔を出産。晩秋～初春に冬眠する。

分布(県内)：岩美町竜神洞。

分布(県外)：北海道，本州，四国，九州(日本固有種の可能性が高い)。

生息環境：洞穴性で河川・小丘陵・森林などで採餌。



保護上の留意点：ねぐらとなる洞窟が消失したり，洞窟の内部の環境変化により，分布域や生息数が減少していると思われる。生息状況の実態調査が必要。

文献：

澤田 勇(1984)山陰地方における洞穴棲コウモリの分布及びその内部寄生虫相. 奈良教大紀要, 33(2): 33-44.

澤田 勇(1996)「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話 - 鳥取県の巻 -. 鳥取生物, 29: 1-5.

執筆：巖城 隆

キクガシラコウモリ 翼手目(コウモリ目)キクガシラコウモリ科
Rhinolophus ferrumequinum (Schreber, 1774)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



撮影：子安和弘

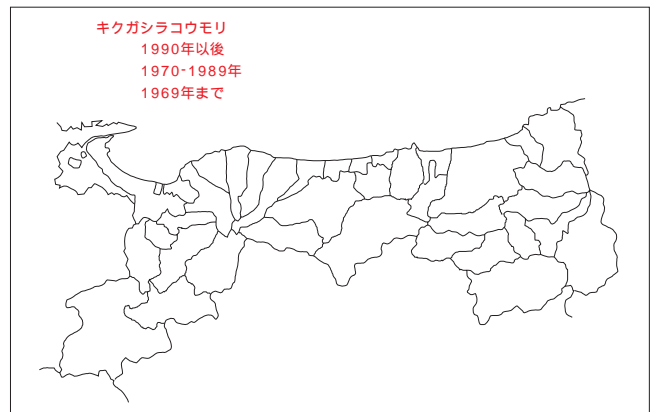
選定理由：生息地の局限度が強いと考えられる。

形態と生態：頭胴長65-80mm，尾長30-45mm，体重20-35gほど。昼間は洞穴で集団で休息し，モモジロコウモリと混群を形成することもある。森林内の下層で採餌し，地表や葉上にいる大型昆虫も捕食する。初夏に1仔を出産。

分布(県内)：岩美町，福部村，倉吉市，三朝町。

分布(県外)：北海道，本州，四国，九州；ヨーロッパ，モロッコ～インド北部，中国，朝鮮半島。

生息環境：洞穴性で河川・平地・小丘陵・森林・草原などで採餌。



保護上の留意点：ねぐらとなる洞窟が消失したり，洞窟の内部の環境変化により，分布域や生息数が減少していると思われる。生息状況の実態調査が必要。

文献：

澤田 勇(1984)山陰地方における洞穴棲コウモリの分布及びその内部寄生虫相. 奈良教大紀要, 33(2): 33-44.

澤田 勇(1996)「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話 - 鳥取県の巻 -. 鳥取生物, 29: 1-5.

執筆：巖城 隆

モモジロコウモリ 翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科
Myotis macrodactylus (Temminck, 1840)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



撮影：浦野守雄

選定理由：生息地の局限度が強いと考えられる。

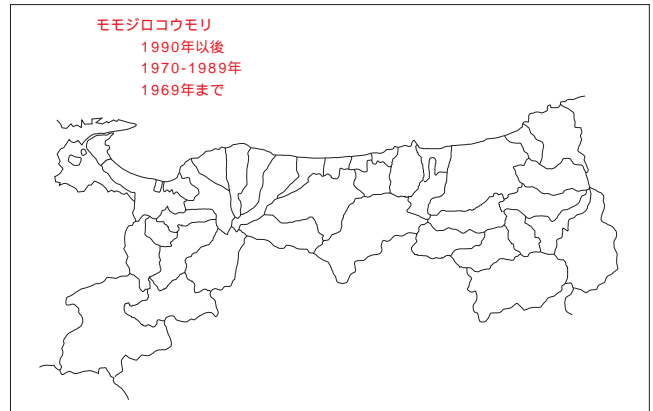
形態と生態：頭胴長45-60mm，尾長30-45mm，体重5.5-11g程度。昼間は洞穴で休息し，雌雄の混じった集団を作る。飛翔昆虫類を捕食。初夏に1仔を出産。コキクガシラコウモリ，コビナガコウモリとよく混群を形成する。

分布(県内)：岩美町竜神洞。

分布(県外)：北海道，本州，四国，九州；シベリア東部，サハリン南部，朝鮮半島。

生息環境：洞穴性で河川・丘陵地・森林で採餌。

保護上の留意点：ねぐらとなる洞窟が消失したり，洞窟



の内部の環境変化により，分布域や生息数が減少していると思われる。生息状況はの実態調査が必要。

文献：

Sawada, I. (1985) *Vampirelepis shirotanii* sp. n. (Cestoda: Hymenolepididae), with records of known cestodes, from bats of Japan. Zool. Sci., 2: 405-409.

澤田 勇(1996)「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話 - 鳥取県の巻 - . 鳥取生物, 29: 1-5.

執筆：巖城 隆

ヤマコウモリ 翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科
Nyctalus aviator (Thomas, 1911)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：絶滅危惧II類(VU)



撮影：浦野守雄

選定理由：古い文献(1955, 1964年)に記録されるのみで，現存すれば生息地の局限度が強いと考えられる。

形態と生態：頭胴長90-110mm，尾長50-70mm，体重35-60g程度。昼間は樹洞で休息し，一晩中，飛翔昆虫類を捕食

する。多くは2仔，まれに1仔を初夏に出産。晩秋～初春に冬眠する。

分布(県内)：日野郡。

分布(県外)：北海道，本州中部以北，対馬，壱岐，福江島；中国東部，朝鮮半島。

生息環境：樹洞性。

保護上の留意点：ねぐらとなる樹洞のある場所で，大木を極力残したり，さらに増やす必要があると思われる。生息状況の実態調査が必要。

特記事項：哺乳類学会選定RDBで希少種。

文献：

日野郡科学教育研究会・日野教協教育部理科班(編)(1955)I.脊椎動物門1.哺乳綱。「日野郡生物誌」, pp. 15-16.

美田 正(1964)生物の種類と生態 A.動物について(3)哺乳綱. p. 10, In:鳥取郷土研究会(編)「郷土の自然と社会」.

執筆：巖城 隆

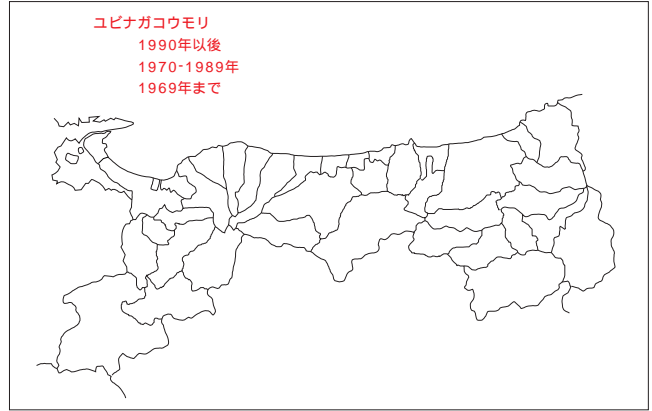
ユビナガコウモリ 翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科
Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



撮影：浦野守雄



選定理由：生息地の局限度が強いと考えられる。
 形態と生態：頭胴長60mm，尾長55mm，体重15g内外。昼間は洞穴で休息し，数百頭以上の大群を形成。飛翔昆虫類を捕食する。初夏に1仔を出産。初冬～初春に冬眠する。
 分布(県内)：岩美町大羽尾東の竜神洞。
 分布(県外)：本州，四国，九州，対馬，佐渡；アフガニスタン～インド，中国，朝鮮半島，ロシア沿海州。
 生息環境：洞穴性。河川・丘陵地・森林・草原などで採餌。
 保護上の留意点：ねぐらとなる洞窟が消失したり，洞窟

の内部の環境変化により，分布域や生息数が減少していると思われる。生息状況の実態調査が必要。

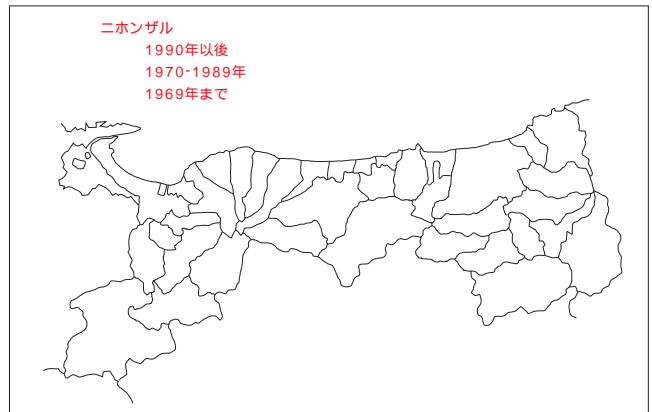
文献：
 阿部 永ほか(1994)日本の哺乳類。東海大学出版会，東京。
 澤田 勇(1994)日本のコウモリ洞総覧。自然誌研究雑誌，2/3/4: 53-80。
 澤田 勇(1996)「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話 - 鳥取県の巻 -。鳥取生物，29: 1-5。

執筆者：巖城 隆

ニホンザル 霊長目(サル目)オナガザル科
Macaca fuscata (Blyth, 1875)

鳥取県：情報不足(DD)

環境省：-



選定理由：1960年頃まで県内には複数の群れがあり餌づけで集団捕獲していたが，現在ではどの地域でもほとんど単独でしか記録されず，県内に生息基盤があるかどうか不明。群れとして通年安定して生息することが確認されるなら要保護。
 形態と生態：頭胴は50-70cm前後，尾は5-9cm前後ときわめて短い。おもに，広葉樹林の樹上で木の実，若芽，葉，樹皮，昆虫，小鳥の卵などを食べて生活する。ボス猿を中心にして集団で行動するが，離れ猿として単独生活するものもまれでない。昼行性でねぐらは毎晩変わる。
 分布(県内)：若桜町，八東町，船岡町，国府町，岩美町，佐治村，用瀬町，智頭町，関金町，日野町，日南町などから散発的に記録されるのみ。
 分布(県外)：本州，四国，九州，屋久島(日本固有種)。

生息環境：おもに里山の落葉広葉樹林帯。近年森林の伐採や開発で生息域が狭められ，人里で農作物の被害がみられる。

保護上の留意点：広葉樹林の縮小にともない，人里への出現の機会が増加している。里山の落葉広葉樹林の維持が最も重要。

文献：
 兵庫探検自然編取材班(1974)「サル」兵庫探検 - 自然編-(神戸新聞社)，166-171。
 川村俊蔵・和泉 剛・零石邦義(1974)「東中国山地の哺乳類に関する調査」東中国山地自然環境調査報告書(兵庫県・岡山県・鳥取県国定公園三県協議会)，67-80。
 山本賢二(1993)ニホンザル。pp. 8-9. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物)。

執筆者：山本賢二

ニホンリス 齧歯目(ネズミ目)リス科
Sciurus lis Temminck, 1845

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：地域個体群Lp

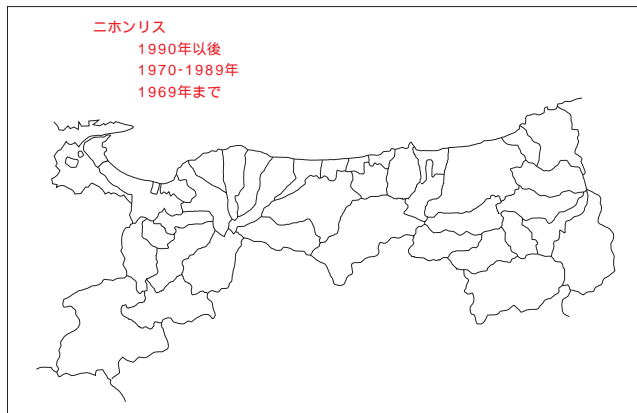


倉吉パークスクエア / 撮影：片岡智徳

選定理由：主な生息環境であるアカマツとナラ類の混交林がスギ、ヒノキ等の人工林化により減少していること、環境省版RDBでも中国地方以西の個体群は絶滅のおそれのある地域個体群に指定されていることから、注意が必要。

形態と生態：腹部は1年を通して白色。背中は、夏毛では赤褐色、冬毛では灰褐色を呈し耳先にふさ毛が生じる。頭胴長20cm内外、尾長15cm、体重250-300g程度。昼行性で、樹上や地上で植物のさまざまな部位を摂食する。秋季に食物を分散して貯蔵し、餌の乏しい晩冬～春季に利用する。

分布(県内)：県東部の里山から山地帯(目撃例：八東町才代 V-2001, 若桜町広留野 X-2000目撃, 船岡町大江 I-2001, 郡家町御門 II-2001目撃, 用瀬町杉森 I-2001, 河原町



兵円牧場 I-2000, など)。県西部および中部は不明。

分布(県外)：本州, 四国, 淡路島。九州では近年確認されていない。日本固有種。

生息環境：海拔100mから900mまでのアカマツとナラ類が混交した森林で密度が高いが落葉広葉樹林や落葉広葉樹林とスギ、ヒノキ林がパッチ状に混在した地域でも目撃される。

保護上の留意点：完全な森林性哺乳類であり、生息にはある程度の広さの森林が必要。農地や草原に囲まれた孤立林や周囲を広い道路で取り囲まれた森林には生息しないので、生息地に道路を建設する場合にはコリドーを設置するなどの対策が必要。

執筆：井上牧雄

ホンドモモンガ 齧歯目(ネズミ目)リス科
Pteromys momonga Temminck, 1844

鳥取県：絶滅危惧 II 類(VU)

環境省：-



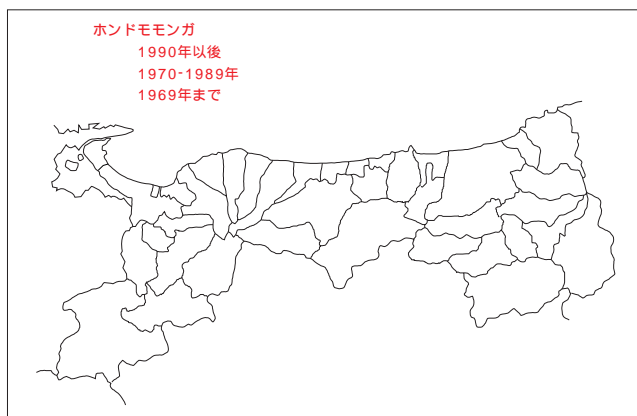
撮影：浦野守雄

選定理由：郡家町(1980年), 若桜町(1967, 1994年), 智頭町(1961年)の山林から記録されるのみで、個体数は少ないとみられる。

形態と生態：目が大きく、前肢と後肢の間に飛膜を持ち、木々の間を滑空する。尾は偏平。頭胴長14-20cm、尾長10-14cm、体重150-220g。樹洞を巣にし、葉、芽、樹皮、種子、果実、キノコを採食。4-5月に2-6仔を産む。

分布(県内)：郡家町, 若桜町, 智頭町。

分布(県外)：本州, 四国, 九州(日本固有種)。



生息環境：山地帯から亜高山帯の森林に生息。

保護上の留意点：山地の自然林の保護・保全とともに現在の生息状況の実態調査が必要。

特記事項：郡家町, 若桜町, 智頭町で捕獲された個体の標本は鳥取県立博物館に所蔵。

文献：和田 洋(1971)鳥取県に生息する動物について - 東部地区の哺乳類と鳥類 - . 郷土と博物館, 1(2) 9-12.

執筆：巖城 隆

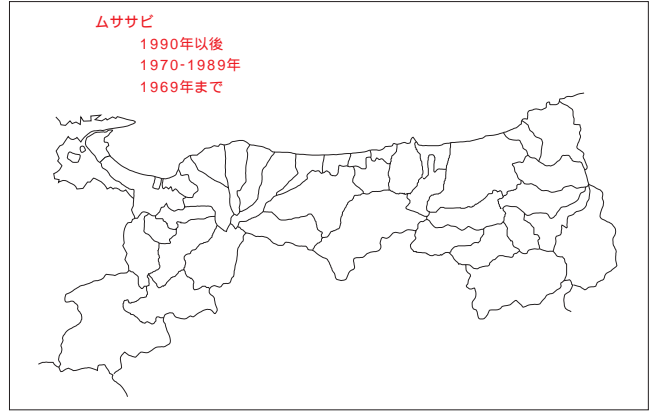
ムササビ 齧歯目(ネズミ目)リス科
Petaurista leucogenys (Temminck, 1827)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：-



広島市安佐南区 1994.3.21 / 撮影：保井 浩



選定理由：県内の生息地が限定されるうえ、個体数も少ないとみられる。

形態と生態：頭胴長30-50cm、尾長30-40cm程度。首から前肢・後肢・尾の間に飛膜が発達する。背面は褐色であるが、個体差が大きい。腹面は白色で、眼と耳の間から頬にかけて、帯状の淡色斑がある。昼は、人家の軒下や戸袋、木のウロなどにつくった巣に潜み、夜間、飛膜を使って飛翔し、樹上を移動して餌を探す。ほぼ完全に植物食で、木の芽・葉・花・果実・種子などを採食する。雌は1haほどの縄張りを持ち、雄はそれと重なる2haほどの行動圏をも

つ。年2回繁殖で、冬と初夏に交尾し、春と秋に出産する。
分布(県内)：智頭町、鳥取市、三朝町、倉吉市、米子市、西伯町などで記録がある。

分布(県外)：本州、四国、九州(日本固有種)。

生息環境：低山から亜高山帯までの天然林、発達した2次林に生息する。

保護上の留意点：繁殖に用いるのは大木にある樹洞などであり、また、採食を自然林で実る植物や果実に依存することから、広大な自然林の保存が必要となる。

執筆者：片岡智徳

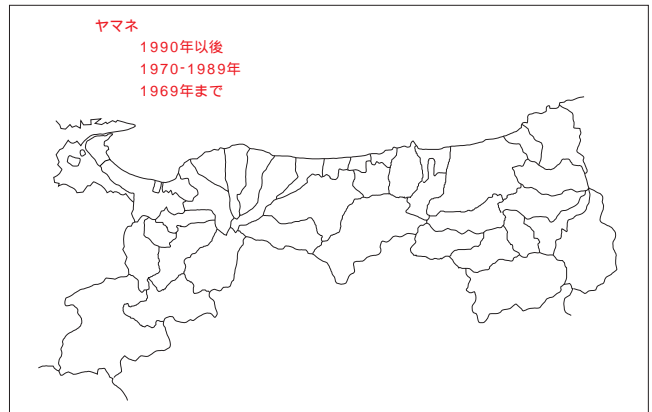
ヤマネ 齧歯目(ネズミ目)ヤマネ科
Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

鳥取県：絶滅危惧 II 類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



氷ノ山希米 1999.9.11 / 撮影・提供：氷ノ山自然ふれあい館響の森



選定理由：生息域が大山および八東町から若桜町にかけてのブナ帯の山地に限定され、個体数も少ないとみられる。

形態と生態：ネズミに似た体型。短毛だが尾は長毛で縷状となる。四肢や耳介は短い。淡い褐色の頭胴は長さ8cm前後で背中に太い黒帯が走る。尾は5cm前後で黒帯はない。夜行性で木の実や昆虫などを食し、昼間は樹洞でやすむ。冬季は体温や代謝速度を下げ、冬眠する。

分布(県内)：八東町、若桜町、大山町。

分布(県外)：本州、四国、九州、隠岐島後。日本固有種。
生息環境：背後にブナ林を控える針広混交の天然林。

保護上の留意点：原生的森林など自然林の保護、および樹洞のある老齢大径高木の保存が重要である。

特記事項：国の天然記念物(1974年指定)。

文献：山本賢二(1993)ヤマネ。pp. 10-11. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物)。

執筆者：山本賢二

ツキノワグマ 食肉目(ネコ目)クマ科
Ursus thibetanus G. Cuvier, 1823

鳥取県：絶滅危惧 II 類(VU)

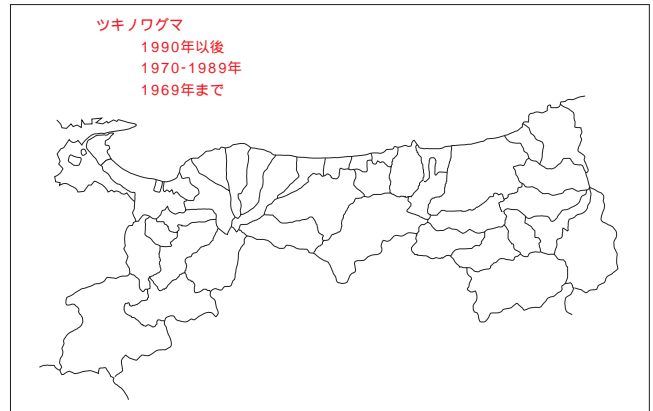
環境省：地域個体群(Lp)



撮影：盛岡芳明

選定理由：県東部の山域（兵庫県・岡山県を含む東中国山地）に生息地が限定され、個体数が減少傾向。「東中国地域のツキノワグマ」は環境省RDBで「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定。

形態と生態：頭胴長110-140cm，体重40-130kg程度。体毛は黒く，ふつつ胸に三日月型の白毛がある。聴覚や嗅覚に比べ視覚はよくない。植物食性の強い雑食性で，越冬前の主食としてクリ，ミズナラ，トチノキなど落葉広葉樹の堅果に強く依存する。12月頃から4月頃まで大木のうろや岩穴で冬眠。出産は冬眠期間に1-3頭で寿命は20-30年である。雄の行動範囲は100-200平方kmに及ぶ。東中国山地には，150頭前後が残されているのみで，遺伝的多様性の低下や近交弱勢が危惧される。ブナ帯を中心とする落葉広葉樹林が本来の生息域。しかし，生息域の森林環境の改変等にもとない，人里近くに出没し果樹や養蜂等に被害を与えることがある。



分布(県内)：八東町，若桜町，智頭町，船岡町，国府町。
分布(県外)：本州，四国，九州（ほぼ絶滅）；ヒマラヤ，東南アジア北部，中国東北部，ロシア南東部，台湾。

生息環境：ブナ帯を中心とする落葉広葉樹林。

保護上の留意点：開発や伐採で森林そのものが減少しているため，堅果のなる落葉広葉樹林の再生を考える必要がある。また，個体群どうしを奥山の自然林の回廊（緑の回廊）で結ぶことも有効と考えられている。

文献：

東中国クマ集会実行委員会（2000）ツキノワグマ・東中国クマ集会の活動と保護管理の課題報告書。

鳥取県生活環境部景観自然課（2001）希少野生動物と農山村を考えるシンポジウム報告書。

山本賢二（1993）ツキノワグマ。pp. 12-13. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物)。

執筆者：山本賢二

ニホンオオカミ 食肉目(ネコ目)イヌ科
Canis lupus hodophilax Temminck, 1839

鳥取県：絶滅(EX)

環境省：絶滅(EX)



ニホンオオカミ下顎骨（青谷町青谷上寺地遺跡）

選定理由：青谷町^{あおやかみじち}青谷上寺地遺跡から下顎骨が出土しており，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

形態と生態：頭長は1m20cm程度でノイヌよりひとまわり大きい。シカやノウサギを補食。

分布(県内)：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。

分布(県外)：かつては本州，四国，九州に広く分布していたが，1905年に，奈良県の東吉野村で捕獲されて以来，記録はない。

生息環境：山林や原野。

特記事項：江府町にはヒトがオオカミにおそわれたという史実があるが，本当にオオカミであるのかどうかは確認できない。

文献：

井上貴央（2002）青谷上寺地遺跡の動物遺存体について。青谷上寺地遺跡4（印刷中）鳥取県教育文化財団

執筆者：井上貴央

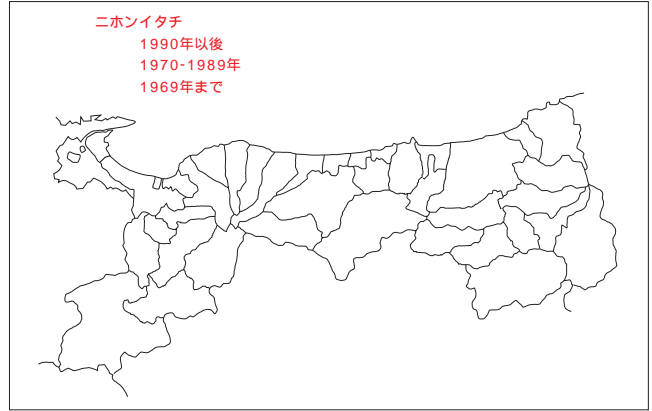
ニホンイタチ 食肉目(ネコ目)イタチ科
Mustela itatsi Temminck, 1844

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



広島県大野町 1996.3.17 / 撮影：保井 浩



選定理由：平野部ではニホンイタチの生息域がチョウセンイタチ(帰化種, *Mustela sibirica* Pallas, 1844)におびやかされつつある。県内では山間部を中心に健在ではあるが、市街地では近年の記録はない。

形態と生態：頭胴長(雄)約30cm(雌)約20cm,尾長(雄)15cm(雌)8cm程度。胴長でやや長い尾があり、四肢は短い。全身山吹色だが、額から鼻鏡にかけて他と区別できる濃褐色の斑点がある。雌は一定の行動圏をもち、土穴などを巣とする。雄はいくつかの雌の行動圏と重なる行動圏をもつ。カエル・ネズミ類・鳥類・昆虫類などのほか、ザリガニや甲殻類なども捕食する。

分布(県内)：近年の確実な記録は、郡家町、八東町、若桜町、用瀬町、河原町、北条町。

分布(県外)：本州、九州、四国。その近隣の島嶼(佐渡島、隠岐諸島、伊豆大島など)。日本固有種。

生息環境：水辺を好み海岸や河川の近くに生息する。林、水田、畑など、人家の近くにもみられる。

保護上の留意点：県内では山間部では本種の好む水辺の環境や、田畑周辺の環境整備が望まれるとともに、チョウセンイタチの駆除などによる生息域の脅威の除去が必要であろう。

執筆：片岡智徳

ニホンカワウソ 食肉目(ネコ目)イタチ科
Lutra lutra nippon Imaizumi & Yoshiyuki, 1989

鳥取県：絶滅(EX)

環境省：絶滅危惧 IA 類(CR)



ニホンカワウソ頭骨 撮影：井上貴央

選定理由：米子市^{めくみ}目久美遺跡、青谷町^{あおやかみじち}青谷上寺地遺跡から頭蓋骨や下顎骨が出土しており、かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

形態と生態：体長70cmほどで、尾長は40-50cmほどある。全体に細長く、体毛は茶褐色である。夜行性である。エビ、カニ、小魚を捕食するほか、ノネズミ類を捕食していると推測されている。

分布(県内)：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。

分布(県外)：かつては北海道、本州、四国、九州に広く分布しており、明治・大正年間には大量に捕獲された記録がある。その後、河川環境の変化とともに徐々に数が減り、瀬戸内海や高知県南岸にごく少数が生息するにすぎないと考えられている。1979年に高知県で目撃されたのが最後で、現在でも生息確認の努力が続いているが、それ以降は発見されていない。

生息環境：川の中流の溪流から沿岸部、および離島の河川の下流。

特記事項：鳥取県立博物館には古い剥製標本があるが、産地は不明である。

文献：

井上貴央(1986)目久美遺跡より検出された動物遺存体について。加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, pp. 129-138。

井上貴央(2002)青谷上寺地遺跡の動物遺存体について。青谷上寺地遺跡4(印刷中)鳥取県教育文化財団。

執筆：井上貴央

ニホンアシカ 食肉目（ネコ目）アシカ科
Zalophus californianus japonicus (Peters, 1866)

鳥取県：絶滅(EX)

環境省：絶滅危惧 IA 類(CR)



ニホンアシカ下顎骨（青谷町青谷上寺地遺跡） 撮影：井上貴央

選定理由：青谷町^{あおやかみじち}青谷上寺地遺跡から下顎骨や前肢の骨などが出土しており，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

形態と生態：体長は1m50cm-2m50cm 程度。雄は雌より大きく，成獣になると矢状稜が発達し，頭頂部にこぶがで

きる。イカや魚類を補食。繁殖期にはハレムを形成する。
 分布(県内)：少なくとも明治以降の確実な生息記録はない。

分布(県外)：北海道から鹿児島まで太平洋側や日本海側のほとんどの海域に生息していたが，現在では姿を見ない。

生息環境：沿岸や離島の岩礁に生息。隠岐や竹島では海食洞を利用していたことが分かっている。

保護上の留意点：鳥取県内では現在生息の可能性はないが，朝鮮半島などの近隣にまだ生息していて，漂着する可能性があるので注意を要する。

特記事項：島根県竹島では明治大正年間に大量の捕獲が行われた事実がある。

文献：

井上貴央(2002)青谷上寺地遺跡の動物遺存体について. 青谷上寺地遺跡4(印刷中)鳥取県教育文化財団.

執筆者：井上貴央